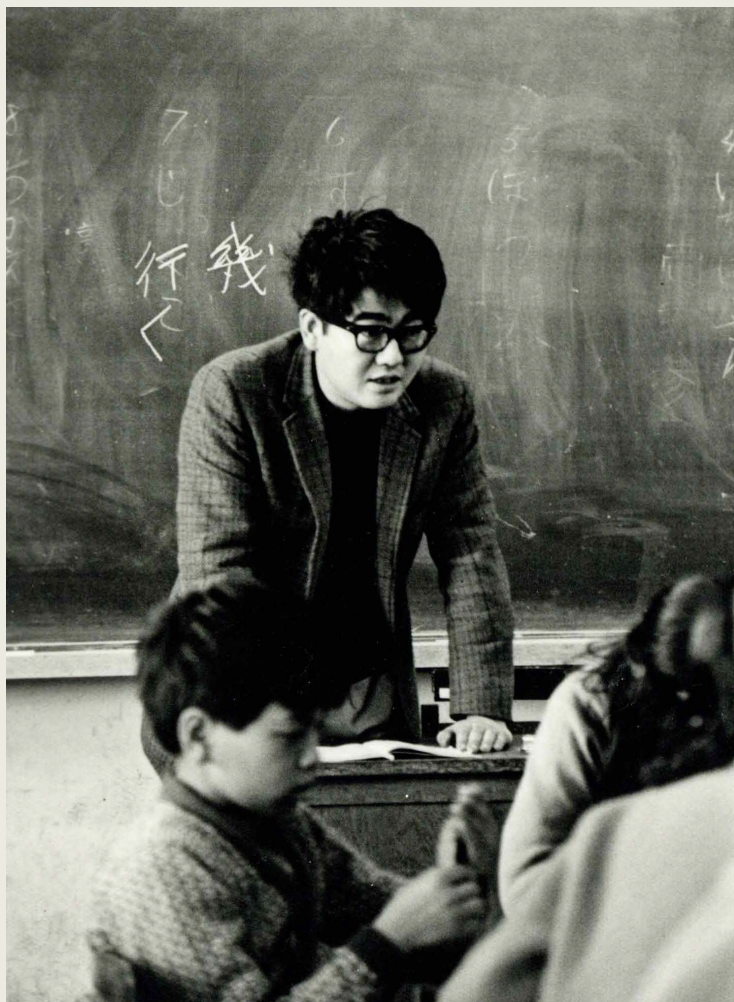


教育

新宝島

1972-2000

呼びかけ/贈る言葉



3月特典

向山洋一教育資料

No. 04

2024
MAR.

本資料について

「別れがあるから人の世は美しく、出会いがあるから人の世は素晴らしい」と向山洋一氏はいう。

今年も別れの季節がやってきた。

卒業式での「呼びかけ」と卒業生への「贈る言葉」を特集する。

なんと、嬉しいことに今月は特典音声と特典映像の2本立てである。

- (1) 特典音声 向山洋一「呼びかけ・卒業式練習」雪谷小5・6年（58分）
- (2) 特典映像 向山洋一「教え方教室」新潟会場（8分）

また、本冊子には

- (1) 「卒業式呼びかけ」大森第四小（二代目）1972.3
- (2) 「卒業式呼びかけ」大森第四小（二代目）1975.3
- (3) 「卒業式呼びかけ」池雪小 1997.3

および

- (4) 向山洋一「別離の唄」大森大四小（二代目）1972.3.25

- (5) 「卒業アルバム文集」大森第四小（二代目）1972.3

- (6) 「卒業文集」大森大四小（二代目）1975.3

- (7) 「卒業文集」調布大塚小（二代目）1977.3

- (8) 向山洋一「学級通信エトセトラ」調布大塚小（三代目）1977.3

- (9) 向山洋一「学級通信スナイパー」調布大塚小（四代目）1979.3

- (10) 「卒業文集」雪谷小（六代目）1988.3

- (11) 「卒業文集」多摩川小（九代目）2000.3

- (12) 「卒業文集」多摩川小（九代目）2000.3

が収録されている。

解説は、手塚美和氏である。

特典音声はこちら



<https://vimeo.com/914971404/35e1aeb09b>

特典映像はこちら



<https://vimeo.com/914946325/efb65ec1a6>

向山洋一氏は、次世代を担う若い先生方のために、20万点を超えるさまざまな実物資料を残した。これらの一部を、メルマガ「谷和樹の教育新宝島」の特典資料として、会員限定で公開する。

● 向山洋一の教育資料を解説付きPDF冊子にして毎月一回配信（30ページ前後）

● 向山洋一の未公開映像・音声を年6回以上配信（不定）

●向山学級一代目卒業生 1972年3月



よびかけ

実行委員会

昭和47年 3月6日

けさのとりまこの森ヶ崎の地にも
新しい芽が顔を出した

たくましい雑草達が

今、卒業しようとしている

問

ランドセルをばがませ

胸に新しい名ふたをつけ

糸をつないで繋ぎしてきた友達

いたずらをしてしかられていた僕達

近頃はかりいた友達

まだこのころが小なかつた

まだこのころが小なかつた

問

このら年間に送りだした友、むかえた友

みんなで輪をつくり、歌をうたい

かたをくみまかえた友

あせを流し、洋服をまっ黒にしながら、登った大室山

さんだ空気をすくいながら走ったマラソン

ペチャクチャ話しながらもおもしろかった食事

足がくたくたになってもがんばった城ヶ崎ハイキング

帰りたくないう、帰りたくなうと思いつながらの閉校式

帰りの電 車の中で、語りあった

友達には忘れられない伊豆高原運動教室

忘れられない2泊3日だった

問

自分達のカで、作りあげた学級の活動

討論と批判を通じて作りあげた友達との活動

掲示、行事、集会、保健、学級文集、そして新聞

まだまだあった

わー回学級新聞コンクールでとった特選

一組も、二組も、三組も、特選だった

問

授業は真実を追求する場だった

授業は何かをフクリだす場だった

だから私達の心はいつも真剣だった

いつも執中していた学級総会

みんなの知恵を集めて決めた決意もあった

差別をしていると行って批判されたこともあった

何時間も続けて学級総会をしたこともあった

議長もみんなやっていた

発言もみんなでした

そんなことを重ねて僕達は二歩一歩と前進していった

成長していった

今ではもう手のひらもこんな大きな手になった

問

私達のおかげで仕事をしてくださった

給食のおじさん、おばさん

みどりのおばさん

主事のおいさん、おばさん

事務の方達

ほんとうにありがとうございました

とってもおいしい給食でした

原紙もマジックもたぐいんつかゆせていただきました

校庭の松が、いつも心をなぐさつけてくれました

事故もびく学校にかよいました

ほんとつに、ほんとうにありがとうございました

問

これから先、私達は雑草のように

しまわれてもしまわれてもたうあかかって生きていきます

先生方、さよつばら

大森才四小学校さよつばら

(終リ)

別離の唄

一九七二、三、二五
大四小六の三教室

向山洋一

ここに別れの時は来た。

この時にあたり、多くは語るまい。

一匹狼のたくまじさと野武士の如き集田を、
その心、その魂を、自らのものとして、

一匹狼とは、一人ぼっちの狼をいふのではな
一人でも大きな狼をいふのではな
たつた一人でも、集田にたちまかえる。

勇気と力を拵った狼をいふのだ。

それだけの内容と情を拵った狼をいふのだ。

そしてそれは、多くは敗北の中からつくられる。

まけて、まけて、まけて、まけて、まけて、まけて、
存あちあがあることからつくられる。

敗北傷つた狼が、再び起きて突えあがる

そんな強さをあつた人間にだけ。

何をすゝめ集田ではけれはなけり、
なにをいふも、
なにをいふも、

今までの生活を過してきやみじめ。

野武士の如き集田とは温室育ちの集田をいふので
はない。なほなほとした集田をいふのではなし。

差別のある、上下のある集田をいふのではなし
荒々しく益々しい一匹狼の集田体、そのような、
たくましい集田を、論争の中から、批判の中から
自分をすべてさらけ出す事の中からつくりあげろ。
どのような人間もすばらしいことを

どのような人間にも無限の可能性のあることを
決して忘れるな。

だからこそ上下の関係を許せなことを

だからこそ差別と闘ふことを

だからこそ批判をすすめることを

だからこそ相手を信頼するのことを

だからこそひたすら努力をすすめることを

俺とておれとておれとておれとておれとておれとて
俺とておれとておれとておれとておれとておれとて
俺とておれとておれとておれとておれとておれとて

ほじつめる空気の中心のあの日のジャンタより、
心の奥のその奥まで大し通した
あの痛みをききみこめ。

一人一人が向われ続けた七冊向の尊厳慈愛の
心までぬいたあの痛みをききみこめ
しっかりとききみこめ。

俺等は、俺等のすぐそばにきた日々を
想い出としてなつかしくして語るのゆえに
心の奥までききみこんだあの痛みを、あの痛みを
バネとして、

人間を心から信じるべきの故に
許す^{べき}のできない自分自身と他人に、かかんで
あろう。

自分だけはいまをほうつとすめる恥をかきたく
とこころを追求した心の弱さを
ひつこみがちにならざるためのためにを
更にほり下げろ、更にのりこえろ。

人間の心を信じきまるその一途はすべてをかけ
とりわけ、しいたげられた人間の心を信じる
その心一途にかけ

自分達の道をきりひらいていけ、

くおどまかんじんかんじん

あんしたーちゃよかしゅ

よかしゅよか帯よか着ひん

くおどがうちんたり

道ほちゃいけろ

通る人ごち花いけろ

く花はなんの花

シンシンつばき

木は天からもらい水

俺が教師になつてこの四年向の日々

とりわけ君達との二年向の日々

それは俺自身にとっての価値ある日々だった

俺は君達に心から感謝する

誇り高く行け！！

向山 洋一



来る年も、また来る年も、来る年も
ありてありたし、この子らとともに



教師であることの重さを
自分に向いて続けながら、この四年間
の日々を送ってきた。

俺は人間の可能性を信じた。
俺は集団の力強さを信じた。
俺は科挙の業績しさを信じた。

だから
君達のすべての才能を育てようとし
た。

君達に、未来を洞察する目をつけよ
うと思った。

君達に、活動・批判・追求の大切さ
を教えようと思った。

自分にさびしさを果すことによつて
それが君達に伝わるのを信じたとい
思った。

俺は差別を憎んだ。

この非人間的なことを、心の底から
憎んだ。
君達もまた、そうであった。

それと斗い、それを克服するのは、
決して、平易なことではない。

それには、一匹狼のたくましさや野
武士の如き集団が、要求される。

一匹狼とは、仲間はずれの狼をい
うのではない。

必要なり、一匹でも集団全体を相手
にまわせる狼をいうのだ。

とぎすまされに神格と、ちからを持
った狼をいうのだ。

野武士の如き集団とは、バラバラの
集団をいうのではない。

見かけただけの統一を拒否し、なよな
よした団結を否定し、真に自立した

人間の集団を目指す集団をいうのだ。

それなくして、なんでこの困難な
状況を克服していけよう。

それなくして、なんで自らの生き方
を切り崩していけよう。

たくましさも、やさしさも、そんな
中にこそある。

君達は

かつて、激動する時代にうまれ
かつて、激動する時代に生き、

やがて、激動する時代に死んでいく、
一人の人間もまきこまずにはいはい
歴史の流れの中でその人生を送る。

その生き方は、人によりさまざま
であらう。

だが、いつの日か再会したとき、
たとえどのような所にその身があろ
うとぞ。

自分の生き方をつかんでいる君達で
あることを願いたい。

たくましく生きていく君達であるこ
とを願いたい。

それでは、誇り高く行け！！
心のスクラムをがっちり組め！！
どこにいようと、そのスクラムを離
すな！！

たとえ腕がちぎれようとも……

たとえ腕がちぎれようとも……

たとえ腕がちぎれようとも……

たとえ腕がちぎれようとも……

- 1 大地に根をしまかりとおろしている
- 1 ぼくたち
- 2 私たち
- 3 ぼくたち
- 4 二の大森第四小を校で退してまた六年間
- 5 ぼくたちが教えられたものは根性
- 6 根性
- 7 私たちがつくり上げたものは友情
- 8 友情
- 9 ぼくたち、私たちが喜びとったものは心の強さだった
- 10 笑い話が出来ない私たち
- 11 時には雨といっしよに晴まぬらしながら泣いた私たち
- 12 泣いた私たち
- 13 それが今や、と実をむすぶ
- 14 実をむすぶ
- 15 まさうは 28 僕たち 11 私たちの卒業式 全 卒業式
- 16 昭和四十四年・春四月
- 17 桜の舞り散る校門をへぐり
- 18 男全、ぼくたちは 女全 私たちは
- 19 大森第四小を校に入堂した
- 20 見よこの間くもりのすべがめずらしかった等日
- 21 遠足で飯を食ったおかしな、たお弁当
- 22 全 行弁当
- 23 飯の目にもみれて飯をかいた初めての慶賀会
- 24 二年でやっした卒業式
- 25 まっかなぼく、べんも、よくそめて一生懸命、やっした卒業式、別
- 26 はじめてのクラスが不安と期待で迎えた三年
- 27 遊びに海中、よく先生を困らせた
- 28 先生を困らせた
- 29 男子と女子がよくケンカをして仲良くなった四年
- 30 仲良くなった四年
- 31 ムニシとよびかけて祝った四十年記念式典
- 32 全 四十年記念式典 全 六年度級パーティー
- 33 意気と意気を感じさせて計画作りあげた
- 34 全 六年度級パーティー
- 35 上級生を招いて一泊に楽しんだ
- 36 力を出し合い協力することの意味を知った
- 37 全 協力することの意味を知った
- 38 男全、そして僕たち 女全 私たちは
- 39 大森第四小学校の最上級生になった
- 40 全 最上級生になった
- 41 月曜の朝会が涙を流すようになった教室
- 42 全 如月かんてんと先生にどなられ、涙を流し泣き、くいしはり泣き下した小森校最後の卒業式
- 43 全 卒業式
- 44 ひとりひとりの力を出し叩いて完成した植栽詩
- 45 全 31の日に奪せて
- 46 演技力が勝負だった 全 「光れ三日月」
- 47 33のどが痛くなる程だった 全 「合唱」
- 48 全 奥田生活の重要さを教えた伊豆新橋
- 49 全 伊豆新橋
- 50 燃えさかる赤い炎を団、前をくんで歌った
- 51 36 男女コンビの肝だめし
- 52 37 大森山の頂上を征服した時のあのそう僕、
- 53 38 坂を海岸のてこぼこした岩
- 54 39 光り輝やく岩にくだける純白の涙
- 55 40 私たちが喜び育ったところ 41 それはまた
- 56 全 クラス
- 57 42 或る時はユーモアと笑いで「つつまれ
- 58 43 ある時は批判とれ真実の自分を
- 59 44 ある時はけんかをし、友情が生まれ
- 60 45 その中で作りあげられた心の強さ
- 61 男全、僕たちの 女全 私たちの
- 62 全 ひとりひとりのちがひ類
- 63 46 先生が主要な方、六年度大へんお世話に
- 64 全 お世話になりました
- 65 47 おじさんおばさん方に注意されたことは忘れ
- 66 全 忘れません
- 67 48 本当に長い間、深く育ってくださった、ありがとう、

49 いづまごち 50 いづまごち
51 大森第四小を忘れません
夏をばくたらの大森第四小を

歌・まほうの日はくちつなら
在校生の送るこぼ

52 在校生のみなごん お祝いありがとう
全 おりがこう
53 そう言たちは最上級生
54 六年とう在校生に
55 名参る大田小六年の会流きそっくりそ
のまま教していきます
全 派していきます
全 ひこりはみんなのために
56 在校生のみなごん
57 私たちが大田小の流れが
58 もっと豊かになるように
59 がんばってくださち
全 がんばってくださち
60 やわらかくわたがたい大田小は母のま
全 母のま
男 今頃くたちは 女 私たちは
61 新し門の前に不意にだびて五つて
62 しかし時は正權に冷路にばまてへ
63 ぼくたちは 男 ぼくたちは
64 私たちは 女 私たちは
65 古いからをぬきすてて
全 ぬきすてて

66 大空にはばたく鳥のように
67 百二十五羽の鳥たちは灰色の雲をつきぬけて
68 それぞれがう空へと舞い上がって行く
全 舞い上がって行く
69 スモッグに包まれた大空の中で
全 大空の中で
70 その上の光り輝く大空を求めて
71 助け合い
全 助け合い
72 はげまし合い
全 はげまし合い
73 中學生という新しい道を歩きはじめる
全 歩きはじめる
74 六年間という長くて短かつた年月
75 今ここに小森校生活のすべてを懐ける
76 小森校生活の夢をおろそ
男 たいようなら
女 たいようなら
全 たいようなら
男 たいようなら
女 たいようなら
全 たいようなら
男 たいようなら
女 たいようなら
全 たいようなら

歌の上則まはじまり

「自ず歩美より」大地と空
いつの時でも道歩あるもの
それはいつでも流れつづける
汗を流してはたらいて
美しいものを流りあげていく
空には厚い灰色の雲がある
だがその上には まっとう青空がある
かくれることのない太陽が
カ一はい輝きだしているだろう
ごっかい風が吹いた
灰色の雲がとぎれて
雲筋の光がこころを来た
~~~~~  
〔砂場でまっしやかんていたら  
小三分鐘か一匹 大きなえさを運んで行く  
それは去年の甲虫の羽  
せせせせと はこんで行く  
二〕野原の草ですかり枯れて  
小さな蝶はつかれこたななたの息一こく  
これは今年の冬のことさ  
せせせせと はこんで行く  
~~~~~  
ぼくたちは 私たちは
この空をまっしやかんてして行く
新しい空別の空
向うの空がよんでくる



■ 未采の諸君への伝言口 ■

向山洋一

◇別秋〇〇からの手紙『昨夜から降り始めた秋雨が今日も続く。教室の窓から重くたれこめる灰色の空ばかりながめていた。降りしきる雨の向こうに、あの人の妻がさかんで消えた。授業を聞いていなかった。ノー、トさえとってはいなかった。おれをぼろに魂を見つめながら、その日かそのまま悲しかった。小笠原時代の、何とナイーブであったことが、ほのかに好きだった。〇君をしきりに想い出す。タヌキ。私。失志しちゃった。』

◇S00春〇〇の日記『コンパで飲み屋に行く。人のすばらしさを発見。顔さえ忘れしてしまった小笠原時代の仲間たちとの、自由でのびやかだった生活を思い出す。明日レポートの提出。食糧難が伝えられる。』

◇S02初夏〇〇からの電話『先生ノ私よ、わかるマヤにほっちゃうなあ。タダヌキよ。もう、もうろくしてんの。用件はなんでもシラケちゃうなあ。ボーナスもらったのよ。そんなことはどうでもいいの。約束通り焼き取り屋に連れ行くから、雪ヶ谷大塚の駅前まで出ておいでよ。今、三人で電話してはいるの。いいわね、それではのちほどお目もじして、ごめんあそばせ。』

◇S07秋、女多への祝電『ケツコンオメデトウ。ダンナサン、カノジヨオタイセツニシテクダサイ。デモ、ボクミタイニ、シリニシカレナイデクダサイ。』男多への祝電『ボクミタイニスマートデハンサムナアカチャンがウマレルコトオネガイツツ、ココロカライワセテモラウ。ケツコンオメデトウ。ト』

◇二〇〇〇年「二世が誕生とか、おめでとう。親のありがたさを初めて知ったという君の文をくり返し読んだ。おかくろさんにも久しぶりに会って酒を飲みたい気がする。さぞやいいおぼあちゃんになつてゐることだろう。その点俺はまだまだ若い。へという事を押し売りする年になつてしまった。』正月に例の連中とあい、とびつきりのナポレオンがある。』

◇二〇〇〇年冬、才三回将棋A級リーグ戦、向山初段十三位で最下位。『先生ノ一世記の回、まるで進歩してないじゃないか。』

◇S100秋〇〇からの手紙『ふるさとを遠く離れて、昔のことばかり想い出します。今迄はぬりむきむしなかつたエトセトラを、このごろとり出して読んでいます。同級生の名前も、学校生活のできごとほとんど忘れちゃったのですが、静かになつた感じがこみあげてくるのです。差別はいやだ、俺ものは嫌いだ。』アロにほれ。』そうしたことばを想い出します。いつかみんなが集まりませんか。』この年タヌキおや。ヌヌキ。おや。全員健在。

「一匹狼のたくましさよ、野武士の如き集団を」
「別れがあるからこそ人の世は美しく、出逢いがあるからこそ人の世はすばらしい。」

俺の生きがいであり、俺の誇りであつた諸君達に右のことばを送る。恋にしろ、仕事にしろ、生き方にしろ、その道程をいつの日か、想い出してくれんことを願いつつ、俺は俺なりに、諸君の一人一人にほれこんだ。大好きだった。いつまでも、たっしやで……。

努力の持続・意志の貫徹・愚直の一念 弱さの正視
そうしたものを持った人間を言うのだ

それらは、敗北の中から創られる
自分の弱さを確認した時から成長は始まり
自分のみにくさを知った時から前進は始まる

ロマンを求める！ 夢を追え！
自分の力のいたらしさを
自分の心のいやらしさを
何度でも思い知らさぬがいい

まけてまけてまけぬいて
ほお立ちあがるその時にこそ
諸君と俺の差違いの本論は始まる。

「そんな中途半端な努力で俺がぬけるか。ちゃんちゃんか
らおかしくて問題にもしない」

「何で手をぬいてしまうんだ。最後までぶきない
のは単に手まけたのではない。心の弱さのあらわれ
だ。何をやらせても同じことだ」

「その言葉は何だ。相手を馬鹿にしたのは、自分
が思いあがっているからだ。たかがしめた頭をし
て、思いあがっているから無意識にそんな言葉が
でるんだ。お前はそんな程度で満足してるのか。
たかがそれだけのつまらない人間か。それなら俺
もそれなりに相手をしてやる」

「発言しないのはまちがいを恐れているからだ。そ
うは自分がかっこよく見せたいからだ。何も言
くせして外づらだけよくしようとして…。そういう

えとせとら

NO 223
77.3.25
6の2通信

別れの序章 <出逢いの本章への出立>

ついに別れの時はきた。
諸君と俺の出立の時でもある。
この時にあたり、多くは語るまい。
再び諸君をしかる時はない。
再び諸君をビンタする事はない。
六年二組の教育は、終了されたのだ。

一匹狼のたくましさと、
野武士の如き集団を！

その魂を内なる世界に築け
その心を外なる世界で磨け

一匹狼とは 一人ぼっちの人間を言うのではない
一人では何もできない、弱虫の人間を言うのではない
ロマンもなく、勇気もなく、謙虚さもなく、誠実さもない
そんな人間をさしてゐるのでは断じてない。

自分一人で困難に挑戦できる、たった一人で集団にまかせる
そうした魂と心と精神を持った人間を言うのだ。

人達の可能性の^{とこしえ}永遠なるを確信し
諸君の道を切りひらいていけ!

それほどのような道でもいい。
自分を納得させる道なら何でもいい

いつの日か俺を超えるほどの人間に
俺を超えるほどの価値ある仕事ができる人間に
なってほしい。

そして……

俺との生活が淡い過去となるような
単なる過去となるような
全く忘れ去ってしまふような
そんな充実した 豊かな 人生を創り
そうなる事を 心から願う

俺達はいつの日か再会する時とあろう
そんな時、共に過ごしたこの年月を
思い出として、懐かしさとして
うしろを見て語るのはよそう。

自分の道を…その軌跡をこそ語ろう。

いつの時でも俺は。

諸君の前に立ちはだかる努力をしている自分で
あろうと思う。

我が愛し恋する友人達よ!

出立の時だ!

がっちりと腕を組め! がっちりと心を組め!

えとせとら

No.224
177.3.25
6の2通信

別れの序章 (続出逢いの本章への出立)

のを。にせものというんだ。そんなのはすぐ求口
が出る。俺はそんな奴は相手にしほい」
「何で大切は時にあしやべりする。精神の緊張を
持続できなからだ。心が弱いからだ。そんな奴
は見かけはたのもしそうに見えても。いざという
時まるで駄目だ。何をさせてもできやしほい。そ
ういうのはノラ犬だ。犬の遠吠がせいっぱいだ」

俺達の生活の中で、幾度となく、毎日のように俺
が言ってきた言葉だ。
はりつめる空気の中のあのピンタより
心の奥の奥まであほか体刺し通したあの痛みを
出立にあたり、今一度 刻み込め！

自分だけいいるにしろうとするみにくさを
ひっこみがちになる心のためらいを
途中で投げだす心の弱さを
更にほり下げる 更にのりこえろ。

人間の心をどこまでも信頼し

一組学級通信

り払い
えぬはむらぬい
世は美しく
の世はすばらしい

であつたら
ものとなるだろう
隆いそむくときめきそむく……
いのだ
むいのだ

べしいほどの

を追え!

別れにあたり諸君に願う。
かかえきれぬほどの想いのこの二年間を
全く過去のものとするようは。
そんな豊か人生を創れ……と

俺をぬくほどの努力のできる人向に、
俺の仕事をぬくほどの腕のある人向に
俺を全く過去の者とするようは
そんなすばらしい奴に自分を上げ……と

狙撃手(スナイパー)は諸君のことだ
標的(ターゲット)は俺のことだ。
狙撃手(スナイパー)を学級通信の題にした。最終
の意図はそこにある。

諸君がやがてターゲットを抜き、自分がターゲ
ットの身となった時こそ、俺達の二年間は、
完全に過去のものと成る。
そんな充実した豊か人生を創れ

<惜別の歌>

出立の時が来た 別れの時が来た
俺もまた、五代目と共に旅立つ
四代目の諸君、さようなら
ここに、向山学級四代目のすべてを終了する
1979 3 24 卒業式

スナイパー

1979. 3. 24

NO 355

諸布大塚小学校 六年

別れの序章

卒業式当日のことば

四代目の諸君へ

出立の日が来た 別れの時が来た
今を限りに 血山学級四代目の
すべての者は この教室を去る

思えば二年
何と多くの事を胸に刻んだことであろう
ひとさまにはとりたてて言うほどの事ではまいが
諸君と俺には 他に代えがたい出来事であった
名札 とび箱 嵐の拍手、学級通信、学級新聞
お菓子のお城 パーティー 自営の広場、差別
伊豆高原 百人一首、詩文贈答、空白の四日同
難向、山登り、出口、謝恩会、トラクション……

そして、最後にもう一つ
別れの悲しみを 心に刻込。

俺だって やほり淋しい 俺だって悲しい

しかし

俺はそうした感情をか
諸君に もう一度 教

別れがあるから人の
お逢いがあるから人の

のだ、と。

諸君と俺が永遠に一語
人生は奥にたいくつな
そこには成長も無く出
別れの悔い成長もどな
別れの悔いお逢いなど

諸君の一人一人にはま
未来がまわっている。
ロマンを求めろ！ 寝

呼び掛け

六年	()	()	一
	()	()	二
	()	()	三
			男全
			女全
			全
	()	()	四
	()	()	全
	()	()	五
	()	()	六
	()	()	七
			全
	()	()	八
	()	()	九
	()	()	十
			全
五年	()	()	五
	()	()	六

暖かい日差しに 草も木も

いつせいに 芽をふく春

平成八年三月二三日

ぼくたち

わたくしたち

百五名は、

今、卒業証書をいただきました

いただきました

校長先生のはげましのお言葉

来賓の皆様のお祝いのお言葉

ありがとうございます。

ありがとうございます。

ありがとうございます。

多くの方々に祝福されて

巣立ちゆくわたくしたちの胸は

喜びでいっぱいです。

喜びでいっぱいです。

(卒業生 まわれ右、五年生起立)

卒業生のみなさん

ご卒業おめでとうございます。

全 おめでとうございます。

七 みなさんの胸の花は

八 わたくしたちが、心をこめて作りました。

九 希望にもえるみなさんの姿

十 わたくしたち在校生も

十一 喜びでいっぱいです。

全 喜びでいっぱいです。

(五年生着席)

六年

十一 思えばこの六年間

十二 いろいろなことがありました。

十三 目を閉じると

十四 たくさんの思い出が

十五 きのうのこのように よみがえってきま

十六 平成二年四月六日

十七 小さな胸を ドキドキさせて

十八 小学校の門をくぐった 入学式

十九 新しいランドセル

二十 黄色い帽子

二十一 学校にいくことが とてもうれしかった。

二十二 二年生

- () 二十三
- () 二十四
- () 二十五
- () 二十六
- () 二十七
- () 二十八
- () 二十九
- () 三十
- () 三十一
- () 三十二
- () 三十三
- () 三十四
- () 三十五
- () 三十六
- () 三十七
- () 三十八
- () 三十九
- () 四十
- () 四十一
- () 四十二
- () 四十三

粉だらけになった パン作り ○

苦勞して覚えた 掛け算九九 月

郵便屋さんごっこも楽しい思い出です。 月

みんなでお祝いした ○

創立四十周年記念式典 月

航空写真で撮った人文字 月

今でも下じきを大切にしています。

三年生 ○

初めてのクラスがえ 月

新しい友達がたくさんできました。 ○

リコーダーで美しい曲が ○

ふけるようになりました。 月

平和の森公園でのアスレチック

時間が経つのを忘れて遊びました 月

四年生

初めてのクラブ活動 月

雷小フェスティバルのお店 月

みんなはりきって取り組みました。 月

バスに乗って社会科見学 月

東京の街は 活気にあふれていました。 月

五年生 月

- () 四十四
- () 四十五
- () 四十六
- () 四十七
- () 四十八
- () 四十九
- () 五十
- () 五十一
- () 五十二
- () 五十三
- () 五十四
- () 五十五
- () 五十六
- () 五十七
- () 五十八
- () 五十九
- () 六十
- () 六十一
- () 六十二
- () 六十三
- () 六十四

責任の重さを感じた委員会活動 **早**

自分だけのふりを考え出した あわおどり **早**

一人一人が主役でした **早**

小学校最後の学芸会 **早**

「地球環境SOS」 **早**

すべての生物と仲良く **早**

かけがえのない地球を **早**

守っていくことの大切さに気づきました **早**

日光林間学校 **早**

水しぶきをあげて落ちる **早**

華厳の滝 **早**

戦場ヶ原から見た 真っ青な空 **早**

雄大な男体山

華やかな日光東照宮 **早**

自然や歴史のすばらしさを学びました **早**

六年生 **早**

青空のした **早**

力いっぱいがんばった運動会 **早**

手足にくいこむ砂の痛さをがまんした **早**

組体操 **早**

大きな拍手が うれしかった **早**

志を立てる

向山 洋一

個性的な子どもたちだった。

はちきれんようなエナジイを持ち、だからこ
しばしば脱線した。

それでいいのだと思う。

人が生きていく上で大切なのは、どんな時でも
生き抜いていく生命力だ。

そして、人間は人それぞれであり、それぞれに
かけがえがないという自覚である。

先生が君たちと出会った時、先生は一つの研究
会を誕生させた。

教育技術の法制化運動という。

全国の先生方のすぐれた教育技術方法を集めて
広めていこうという教育運動だ。

全国に炸裂するように広がり、今、すべての都
道府県と海外に研究会が作られた。

それとともに先生は少しづつがしくなり、みん
なにつきあう時間が少なくなったように思う。

しかし、人間にとつて「志」というものが、あ
るいは「ロマン」や「アッコがれ」が、どれだけ大

切かということを感じてもらえたと思う。

これからの人生がすばらしいことを願う。
ロマンを摘け、夢を追え。

すてきな出会いを祈ります

向山 洋一

優しい心を持った男の子がいっぱいいて
元気の女の子がはじけていたクラスでした。
シーンとなった教室に
鉛筆のすわる音だけがして
エトキムたノートは
どの子のも
うつとりするくらにすてきでした。

「幸運を多くにするほき方をするんだよ
そのためには

- 一、返事。あいさつかしつかりできることが大切だ。逢は人から人に伝わってくるんだよ
- 二、誰に対しても公平に、優しく、間違っても人の悪口を言っちゃ駄目だよ
- 三、素直に人の言うことを聞くこと。特にみんなのことを誰よりも考えている。お父さんお母さんが真剣に言うことは、素直に聞くこと

一学期の終業式。こんな話をしたとき、みんな真剣に聞いてました。

この日から、中学校、青春時代の幕あけです。
すてきな人生があることを祈ります

子どもたちは三度飛躍する。

向山氏呼びかけ指導の驚きロジック

手塚 美和

一

向山洋一氏の呼びかけ指導を体験したのは「向山洋一教え方教室」だった。

参加者が呼びかけの言葉を言う。向山氏が次々と評定していく。向山氏の凛とした口調を今も覚えている。

私は、その日の資料の上部に、大きくメモを書いた。

呼びかけの指導は、一人ひとりに言う

私は、6年生の「学年全体」への呼びかけ指導をした経験がない。学級や6年以外では何度か指導した。卒業式での5年生の呼びかけ。「送る会」での他学年の呼びかけ。

それらの指導で向山氏の追試をすると、子どもたちはぐんぐん変わった。会場いっばいに声が響くようになった。

4年生の「二分の一人式」でも指導をした。子どもたちが、保護者に力強く言葉を言う。感極まつて号泣する子もいた。そうした姿を見て、私は向山氏の呼びかけ指導を追試できたことに満足していた。

二

向山氏の「呼びかけメモ」が公開された。

とてもシンプル

であった。ほとんどが「○」か「早」だ。この印から、指導の観点は次の2つであったと推測できる。

① しつかりと言うこと
② 前の人の声が、体育館のはじまで声が届いたと思ったら声を出すこと

私は、自分が書いたメモと比べてみた。「二分の一人式」のときのものだ。

評価の観点は、「大きさ」と「早さ」である。あらかじめ、「大きさ」「早い」と書いておき、

その下に◎・○・△・レをつけていた。「大きさ」は全員の子につけている。「早さ」で評価したのは数名だった。これに対して、向山氏のメモは次のようになっている。

① ◎
② ◎ゆつくりと
③ 早×
④ 早
⑤ 少早
⑥ △
⑦ バラ
⑧ 早/早
⑨ 早1
⑩ リズム

「早さ」の評価は、全体の62%である。向山氏は、単にしつかりと言うことだけを大切にしているのではない。ゆつたりとしたスピード感から生まれる感動こそを大切にしていたのだ。

向山氏のこのメモは、1回目の評価である。2回目は、もっと多くの児童が合格したはず

だ。2回目以降、子どもたちは激変していく。新宝島メルマガ「卒業式呼びかけ」で、谷和樹氏が「一流のプロと素人の差」について分析している。

向山の文章をきちんと読んでいないと、多くの人が、1回目と同じような方法で評定をしてしまいます。

私もそうでした。

向山の2回目の評定は、1回目と全く違います。

ロジックが完全に違います。

私もセミナーで向山氏の指導をうけ、『授業の腕を上げる法則』を何回も読んでいた。

それなのに、「呼びかけ指導のロジック」を認識していなかった。

向山氏は2回目、

ほとんどの子を褒めた

のである。

改めて、自分のメモを見た。

ペンの色は、4種類あった。色を重ねる

たびに◎が増えていく。4回目には、ほぼ全員を褒めていた。褒めてはいるものの、向山氏のロジックとはまるで違う。

私は、褒める子を徐々に増やしていた。

しかも、4回目まで1回目と同じ観点で繰り返し返していた。それでは、今を超えるエネルギーは生まれない。

さらに、向山氏の指導は、1回がわずか3分。3分で、ほとんどの子が素晴らしいレベルに達してしまった。

2回目の評定で褒められなかった子たちが少しいた。向山氏は、2回目の評定で、そのわずかな子たちに火をつけた。彼らは、そこから必死に練習をした。

三

そして、3回目の指導。

向山氏は3回目の指導の前に「語り」を入れていく。

これが、最後の授業です。

よびかけの練習が最後の授業なのです。だから、今までの学芸会や音楽

会と、くらべものにならないものにしてみたいと思います。

このままでも良いのです。だけど、もう一步、やってみたいものです。

3回目もロジックがガラリと変わっている。3回目からは「教師が指導する」というロジックではない。

引き出す指導

子どもたち自身の創造力にまかせるのだ。

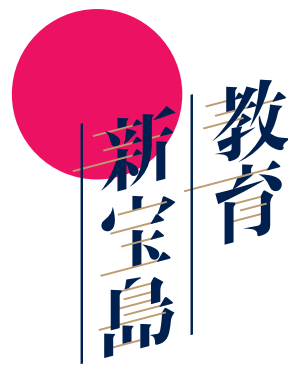
全員に聞きます。この線でいくか、もう一步やるか選びなさい。

このままで良い人。

もう一步やりたいという人。

こうして、子どもたちは、また飛躍するのである。

向山氏が子どもたちに贈る言葉『人間の心を信じるその一点に全てをかけ』と述べた言葉の重み。それを、改めて感じた呼びかけ指導であった。



3月特典

No.04 | 2024年3月

向山洋一 教育資料

1972-2000 呼びかけ/贈る言葉

特典音声

<https://vimeo.com/914971404/35e1aeb09b>



特典映像

<https://vimeo.com/914946325/efb65ec1a6>



発行日 2024年3月1日

発行所 向山洋一教育技術研究所

所在地 〒142-0064 東京都品川区旗の台2丁目4番12号



谷和樹の教育新宝島

<https://shintakarajima.jp>



向山洋一公式ウェブサイト

<https://mukoyamayoichi.com>

このPDFは、プリンタの「冊子印刷」を選択すると冊子になります。
他人への譲渡および個人研究以外の目的で使用することを禁じます。